

19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ

1851-1880 (6)

塩野和夫

第2章 アメリカンボード本部の宣教方針

3 ルーファス・アンダーソンの宣教思想

はじめに

19世紀中期に世界各地で活動を展開していたアメリカンボードに圧倒的な影響を与えた人物がいる。ルーファス・アンダーソン (Rufus Anderson, 1796-1880) である。19世紀前期からボード本部における活動に従事していたアンダーソンは、中期に入るとなぜ世界各地のミッション現場にまで影響を与えることができたのか。

R. P. ビーバー (R. P. Beaver) はアンダーソン研究の導入として、彼の数多くの著作を以下の通りに分類している¹⁾。

- 歴史と伝記 (History and Biography)
- 宣教方針, 方法と問題 (Principles, Methods, Problems of Missions)
- 宣教師に対する指導 (Instructions to Missionaries)
- 運営, 情報, 活動 (Administration, Information, Promotion)

1) R. P. Beaver, 'The Literary Works of Rufus Anderson.' R. P. Beaver (ed.), *To Advance the Gospel: Selections from the Writings of Rufus Anderson* (1967). pp.39-44.

- 代表団の報告 (Deputation Reports)
- 雑録 (Miscellaneous)
- 私信 (Personal)

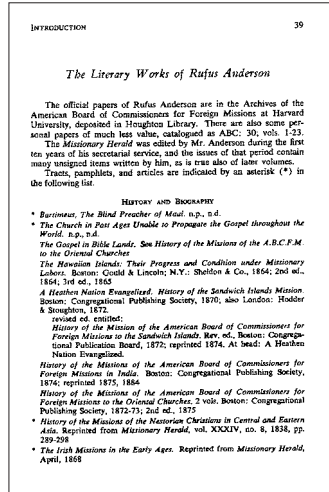
ビーバーによってアンダーソンの著作は7種類に分類されている。これらを学問的な研究内容として分けると、4種類に分類できる。次の通りである。

- ① 歴史学的著作「歴史と伝記」
- ② 宣教論の理論的著作「宣教方針、方法と問題」
- ③ 宣教論の実践的著作「宣教師に対する指導」、「運営、情報、活動」、「代表団の報告」
- ④ その他「雑録」、「私信」

アンダーソンの著作を学問的な立場から分類すると、「①歴史学的著作」、「②宣教論の理論的著作」、「③宣教論の実践的著作」、「④その他」に分けることができた。これは何を意味するのか。それは彼の執筆活動が多様な側面を有していた事実である。したがって、ルーファス・アンダーソンの全体像に迫るためには少なくとも残された数多くの著作に対応する多面性を持った研究が求められている。

1 アンダーソンの思想と行動

ルーファス・アンダーソンは1796年8月17日にメイン州ノースヤーマウス (North Yarmouth) に生まれた。父は会衆派の牧師でホプキンス神学に傾倒し、アメリカンボードの初代通信書記サムエル・ウースターとも親しかった。母は3人の子どもを残して1803年に31歳で亡くなる。父が再婚したため、ルーファスは祖父母に預けられ、マサチューセッツ州ニューグロスター (New Gloucester-



R. P. Beaver, 'The Literary Works of Rufus Anderson.'

ter)に移る。転居した年にブラッドフォード・アカデミー (Bradford Academy) に入学する。1812年2月には父と共にセーレムにあるタバナクル教会 (Tabernacle Church) で行われたボード最初の宣教師任職式に参加し感激している。父が死去した年 (1814年2月) の9月にボードイン大学 (Bowdoin College) へ入学、卒業前にはブラジルへ旅行している。アンドーヴァー神学校 (Theological Seminary at Andover) へ1819年秋に入学すると、海外伝道への志を持つ6名の仲間と親しくなる。ジェレマイア・エヴァーツ (Jeremiah Everts) の面接を受け、1821年10月にボードの臨時助手として雇用される。1823年には臨時職員 (Occasional Agencies) の補助書記 (Assistant Secretary) として採用される。宣教師の任職を受け、彼が正式に補助書記に任命されたのは1826年5月である。なお、1827年1月にルーファス・アンダーソンはイライザ・ヒル (Eliza Hill) と結婚している。

アンダーソンは行動する人物であった。自ら宣教現場へ出かけ、対話し、思索し、多くの著作を残した。このようにして発表されたのが、「①歴史学的著作」を初めとする作品である。そこで、彼の行動と著作との関わりを①を中心にまとめておきたい。

キューバなどラテンアメリカを巡ったのは1819年・1823-24年で、関連する著作は次の通りである。なお、著作の末尾に分類番号を付している。

Remarks on the Islands of Cuba. ④

1830年代以降はチェロキー族を初めとするアメリカ先住民に対する強い関心を寄せ続けている。なお、1831年5月にジェレマイア・エヴァーツが死去、後任のエライアス・コーニリアス (Elias Cornelius) も1832年2月に死去すると、アンダーソンは海外における宣教活動の責任を負う²⁾。1835年からは最も経験豊かな「主席書記」(Senior Secretary) と呼ばれている。アメリカ先住民に関する著作は次の通りである。

2) この時点でデービット・グリーン (David Greene) が、ヘラルド誌 (*Missionary Herald*) の編集とアメリカ先住民に対する活動の責任を負っている。

Memoir of Catherine Brown, a Christian Indian of the Cherokee Nation. 1824 ①

Memoir of John Arch, a Cherokee Young Man. 1832 ①

ギリシャ・レバノン・エルサレム・シリア・トルコなどの地中海及び中近東地方の巡回は、1828-29年、1843-44年、1854-55年と3度にわたっている。この地域に関する著作は次の通りである。

The Gospel in Bible Lands. ①

History of the Missions of the Nestorian Christians in Central and Eastern Asia.
1838 ①

History of the Missions of the American Board of Commissioners for Foreign Missions to the Oriental Churches. 1872-73 ①

Leading Object of the Missions to the Oriental Churches. 1842 ②

On Missions to the Jews. 1849 ②

Intercourse with the Greek Government on the Subject of Education in Greece.
1830 ③

Objects of the Missions to the Oriental Churches and the Means of Prosecuting Them. 1839 ③

Report to the Prudential Committee of a Visit to the Missions in the Levant. 1844
③

Mr. Southgate and the Missions at Constantinople. 1844 ③

Urgent Claims of the Armenian Reformation. 1851 ③

Observation upon the Peloponnesus and Greek Islands, Made in 1829. 1830 ④

インド・スリランカに出かけ、現地の課題に取り組んだのは1854-55年である。

History of the Missions of the American Board of Commissioners for Foreign Missions in India. 1874 ①

Report of the Deputation to India. 1856 ③

ハワイ諸島に出かけ、現地ミッションの閉鎖に取り組んだのは1863年である。モーニングスター号とミクロネシアにおける宣教活動はハワイにおける活動と関係するので、関連著作もここで挙げておく。

The Morning Star and Micronesia. 1856 ①

The Hawaiian Islands: Their Progress and Condition under Missionary Labors.
1864 ①

Kapiolani, the Heroine of Hawaii, or, a Triumph of Grace at the Sandwich Islands.
1866 ①

A Heathen Nation Evangelized. History of the Sandwich Islands Mission. 1870 ①

Oahu College. 1856 ③

Report of Visit to the Sandwich Islands: Portions of a Report in Preparation. 1863
③

The Recent Interference with Our Work at the Sandwich Islands. 1864 ③

長年にわたるアメリカンボードにおける活動を反映した著作も見られる。次の通りである。

Memorial Volume of the First Fifty Years of the American Board of Commissioners for Foreign Missions. 1861 ①

On Deciding Early to Become a Missionary to the Heathen. 1834 ②

Missionary Schools. 1838 ②

The Essentially Progressive Nature of Missions to the Heathen. 1842 ②

The Native Pastorate an Essential Means of Procuring a Native Ministry. 1862 ②

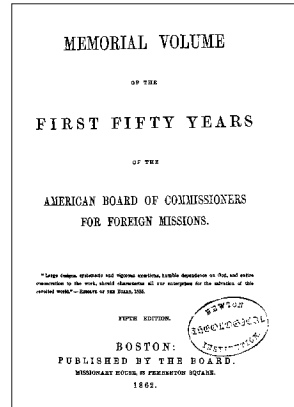
Dr. Anderson's Farewell Letter to the Missionaries. 1866 ④

アンダーソンの著作を彼の活動との関わりから整理した。その結果、「①歴史的著作」、「②宣教論の理論的著作」、「③宣教論の実践的著作」、「④その他」すべてがアンダーソンの行動と深く関係している事実が判明した。

2 宣教論の基本的特色

行動の人であったルーファス・アンダーソンにとって行動と思索、そして著作は深い関わりを持っていた。この特色は彼の宣教論を読み解いていく上でどのような可能性を示唆しているのだろうか。それは思索を伴った行動から宣教論の基本的特質を読み解いていく方法に対する高い妥当性である。そこで若い日の思索と行動から始めて順々にアンダーソンの宣教論を考察する。

アンダーソンが生まれ育ったのは第2次大覚醒運動が発生し高揚していた時期と重なる。大覚醒運動に対して積極的な父と共にアメリカンボード最初の任職式（1812年2月）に参加したのは象徴的な出来事である。海外伝道への夢を語る青年に感激したルーファスは多感な16歳であった。ところで、彼の父は会衆派の牧師で、アメリカンボードを主導したのも会衆派教会である。したがって、ルーファスは無意識のうちにも会衆主義的な教会観の影響を受けて育つ。この事実が後にミッション教会³⁾に対する立場に決定的な影響を与えた。アンダーソン宣教論の中核的な概念として「自治 (Self-governing), 自給 (Self-supporting), 宣教主体 (Self-propagating) の教会」が知られている。実はこの教会像の基底に会衆主義的な教会観がある⁴⁾。すなわち、アンダーソンによると



*Memorial Volume of the
First Fifty Years of the
American Board of
Commissioners for Foreign
Missions, 1862*

3) アメリカンボードが宣教活動によって世界各地に設立した現地人教会を本稿では「ミッション教会」と呼ぶ。

4) R. A. Schneider, *The Senior Secretary: Rufus Anderson and the American Board of Commissioners for Foreign Missions, 1810-1880*. pp.96-97.

海外宣教活動によって世界各地に設立されたミッション教会は組織の指示によってではなく、個別教会の責任と判断によって活動する自由を与えられている。

アンダーソンの神学思想も第2次大覚醒運動の思想的潮流の中に位置づけられる。ニューイングランド神学の創始者とされるJ.エドワーズ (J. Edwards, 1703-1758) や彼の弟子で奴隷解放主義者でもあったS.ホプキンス (S. Hopkins, 1721-1803) は第2次大覚醒運動に思想的影響を与えた。そのためアンダーソンが1819年秋に入学したアンドーヴァー神学校はその当時ホプキンスやエドワーズのニューイングランド神学が生み出す雰囲気満ちていた。そのような中でL.ウッズ (L. Woods) から「キリスト教神学の真理」を、M.スチュアート (M. Stuart) から「聖書学」を、E.ポーター (E. Porter) からは「修辞学」を学ぶ。これらはアンダーソンの宣教論を基礎付けた。アンダーソン宣教論は何よりもまず聖書に立脚する。それゆえに、イエスの宣教命令「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコ福音書16章15節後半) に対する従順が求められた。イエスの命令は宣教活動によるミッション教会の設立根拠ともなる。宣教活動で中心的手段となったのは説教である。説教に続いたのが宣教活動の成果として与えられたミッション教会である。

説教や現地人教会の成立と育成重視により、アンダーソンの宣教論は社会的活動との関わりを問われた。当時、現地人社会において盛んに行われていたのが教育事業である。そこで、著作『ミッション・スクール』⁵⁾の概要によって、教育事業に対するアンダーソンの見解を押さえておきたい。彼はまず宣教現場で多くの時間が教育活動に割かれている事実を指摘する。「異教徒の間で活動する宣教師は余りに多くの関心を学校に注いでいる。そのために、彼らは福音の宣教に捧げるべき時間の多くを教育に用いている。……しかも、学校は宣教活動の主要な構成要素として認められている」。次に、ペトロやパウロを初め

5) R. Anderson, *Missionary Schools*, 1838.

とした使徒の宣教活動や初代教会における教育活動の実際を詳細に紹介する、その上で、アメリカンボードが担っている宣教現場における宣教と教育の状況に触れる。その後、宣教現場における教育活動に関するアンダーソンの見解を公にしている。次の5点である。「1 特定の階層の人たちに福音の知識を教えこむために、教育は有用な手段であると認められている。

2 未開である異教徒の地において神の言の雑誌や印刷物の利用を広げようとすれば、初等教育は不可欠である。

3 小規模の学校と関わりを持ち教育現場で説教をするならば、宣教活動の成果を挙げ影響を持続することができる。

4 異教徒の若者すべてあるいは彼らの相当数の教育を引き受けることはできない。そのための労働力や費用の負担は論外である。

5 教育に関する原則は次の通りである。教育事業はミッションの費用で運用される限り、現地人教師や説教者の育成に資するものでなければならない」。



スケッチ Rufus Anderson

3 アメリカンボードとルーファス・アンダーソン

ルーファス・アンダーソンは19世紀アメリカンボードの2期（1851-80）に与えた影響が顕著である。しかし、アンダーソンは2期においてだけ活躍したわけではない。彼は1821年10月にボードの臨時職員として採用され、候補者としての補助書記（1823年）、正式の補助書記（1826年5月）を経て、主席書記になったのが1835年である。それ以来、辞任する（1866年）まで主席書記の責任を負っている。その後も諮問委員会（Prudential Committee）の委員を1875年まで続けた。したがって、アンダーソンは19世紀アメリカンボードの1期から2期にかけて長く重要な役割を担っていた。

1期からの連続性において、アンダーソンがミッション教会に関して主張した「自治 (self-government), 自給 (self-supporting), 宣教主体 (self-propagating)」という教会概念も理解できる。そもそもアメリカンボード設立の目的は「キリスト教を知らない人々の間で、福音を伝え広めるための方法と手段を考察し、採用し、実施すること」⁶⁾であった。ボード本部は1期を通じて伝道を設立目的とする立場を維持している。したがって、アンダーソンの宣教論は「ボードの設立目的を実践神学的に深化し確立した」と言える。前期・中期を通じてしばしば発生した財政問題もアンダーソンの立場を側面から支持した。すなわち、1820年代・30年代・60年代に生じた財政悪化の状況において、ボードは宣教現場における支出を削減した。この政策が宣教活動を限定的に考えたアンダーソンの宣教論に有利に働く。早くも1830年代後半に加えられた「現地人説教者の養成」という宣教指針⁷⁾も彼の教会論に沿うものであり、財政問題を含めた歴史的脈絡からとらえることができる。

しかしながら、事情は単純ではなかった。アメリカンボードが1期 (1810-50) に宣教活動を実施したインド・スリランカ、アメリカ先住民、ハワイ諸島、中国、東南アジア、アフリカで最も広範に取り組んだのが教育活動だったからである⁸⁾。伝道活動を主体としたい本部と教育活動によって地域社会に足場を築きたい現地との調整が必要となる。このような事情を背景としてボードは1854-55年に代表団をインド・スリランカへ派遣した。ここでは W.F. ストロング (W. F. Strong) の叙述によって概要を押さえておく⁹⁾。19世紀半ばのインド・スリランカでは「宣教師が一般の学校教育とそのための出版事業に追われる危険があった」。そこで、「根本的な方針変化が効果的に実施されるために、ボードは代表団をインド・スリランカへ派遣する。こうして、諮問委員会は

6) "An Address to the Christian Public on the Subject of Missions to Heathen and Translation of the Scriptures." *The Panoplist, and Missionary Magazine United*, October 1813, pp.315-328.

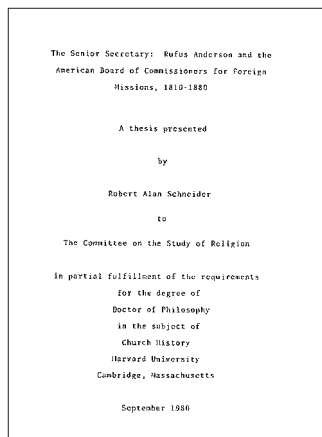
7) 参照、「現地説教者の養成」塩野和夫『19世紀アメリカンボードの宣教思想 1 1810-1850』51-53頁。

8) 参照、「教育を手がかりとした宣教活動」塩野和夫、前掲書、29-38頁。

ルーファス・アンダーソンと A.C. トンプソン博士を1854年11月2日にインドのボンベイ（現在の「ムンバイ」）へ送った」。代表団は「ミッションの教育活動はキリスト教集団への提供に限定すべきである」と主張した。これは「狭義の教育活動方針」と呼ばれる。それに対してアーメドナガル（Ahmednagar）では「広義の教育活動方針」が主張された。この立場によると「真にインドで影響力を持ち、キリスト教の真実の種を広範に蒔いた広義の教育活動方針の利点は疑いようがない」。彼らの主張は説得力を持っていた。それでも、新しい方針に従った活動への調整が進められ、実施されていく。ストロングはインドにおける教育活動の変化についてこのように結論付けている。「高等教育機関の閉鎖と教育組織の再編成による損害のため教育事業は力を失い、終わりを迎えたかに見えた。しかし、宣教活動は福音宣教という新たな強調点を示した」。

ハワイ諸島における宣教活動は1850年代に充実した状況を示していた。W.F. ストロングによると次の通りである¹⁰⁾。

「学校組織は発展し、適応していた。すなわち、15,000名の生徒が500以上の学校に登録し、そのうち5分の4がプロテスタント系だった。……地域住民の4分の1がミッション教会に所属していた。



R. A. Schneider
*The Senior Secretary: Rufus Anderson
and the American Board of
Commissioners for Foreign Missions,
1810-1880*

9) W.F. ストロングはアメリカンボードの動向や現地の活動状況を踏まえながら、ルーファス・アンダーソンの活動を位置づけている。参照、W. F. Strong, *The Story of the American Board*, pp.165-172. それに対して、R. A. シュナイダーは様々な状況を踏まえながらもアンダーソンの思想と活動を中心にまとめている。参照、"A Practical Solution: The Deputation to India." R. A. Schneider, *The Senior Secretary: Rufus Anderson and the American Board of Commissioners for Foreign Missions, 1810-1880*. pp.132-177.

10) 参照、W. F. Strong, *Ibid.*, pp.227-229. R. A. Schneider, *Ibid.*, pp.357-366.

1852年には1,600名が信仰を告白して教会に加わった。……宣教師は監督するだけで、ボードの援助に対する信頼を部分的にし減少させていた」。このような状況は「自治・自給・宣教主体」という宣教論および会衆主義的な教会論からするとミッション教会の自立を促していた。しかし、「ボード撤退への道における困難は最初の宣教着手以上に予想された」。そこで、アンダーソンがハワイ諸島を訪問し、ハワイ福音主義同盟 (the Hawaiian Evangelical Association) と協議し、1863年6月までにアメリカンボードのハワイにおけるミッションの閉鎖を完了した。

おわりに

R. A. シュナイダー『主席書記官－ルーファス・アンダーソンとアメリカンボード 1810-1880』(R. A. Schneider, *The Senior Secretary: Rufus Anderson and the American Board of Commissioners for Foreign Missions, 1810-1880.*) はハーバード大学に提出された博士論文である。その末尾に記されている参考文献表 (Bibliography) の構成は次の通りである。

「史料保管図書館」(Manuscripts, 4館),

「ミッション団体の報告書」(Published Reports, 21種類),

「定期刊行物」(Periodicals, 5種類),

「ルーファス・アンダーソンの著作」(Published Works by Rufus Anderson, 42点),

「その他の著作」(Other Published Works, 203点)。

さらに、「その他の著作」を10年ごとに年代別で分類すると次の通りになる¹¹⁾。

11) W. B. スプレイグ (W. B. Spragne) が1857年から1869年にかけて出版した9巻本については、最終巻が出版された1869年の著作としている。

1811-20年 7点, 1821-30年 4点, 1831-40年 6点, 1841-50年 2点,
1851-60年 17点, 1861-70年 9点, 1871-80年 7点, 1881-90年 14点,
1891-1900年 8点, 1901-10年 5点, 1911-20年 6点, 1921-30年 2点,
1931-40年 6点, 1941-50年 5点, 1951-60年 14点, 1961-70年 42点,
1971-80年 48点, 出版年不明 1点, 合計 203点。

「その他の著作」の10年ごとの分類が示している特色は2点ある。1810年代から1980年までの170年間において途切れることなくアンダーソンに関する著作が出版されている事実、これが第1である。第2に近年（1961年から80年）においてとりわけ多くの著作が刊行されている。これらは何を語っているのだろうか。

アンダーソンの宣教論がアメリカンボードに決定的な影響を与えたのは19世紀の中期（1851-80）である。財政的な問題から生じた要請に「自治・自給・宣教主体の教会」を主張したアンダーソンの宣教論は的確に対応した。加えて、実践神学的な基礎付けを持つ宣教論は宣教現場に対して強力な指導力を持った。しかし、確固とした神学的論拠を持つ宣教論には柔軟性の欠如という弱点があった。19世紀の後半に入ると、ミッション教会を取り巻く社会的な状況に変化が生じる。この変化が要請したのは教会に対する多様な活動、とりわけ社会問題に対する適切な対応であった。キリストの福音は教会に対してだけでなく、社会に対しても働きかけるからである。ところが、柔軟性を欠いたアンダーソンの宣教論は社会の要請に応えることができず、影響力を弱めていく。

ところが、1961年代以降の20年間にアンダーソンの著作は最も多く出版されている。これは何を語っているのか。それは「福音宣教の原点に立脚していたルーファス・アンダーソンの宣教論への関心の復興」だと思われる。確かに、福音は社会の多様な要請に応えた活動を展開する。同時に、福音の活動の中心にはアンダーソンが訴えた「説教」と「自治・自給・宣教主体の教会」が位置付けられる。アンダーソンが時代を越えて読み続けられる理由もここにある。